やがて天国へ

その後、天国へ行くまでの１０年間をマザーデュシェーンはセント・チャールズで過ごされました。その時のマザーデュシェーンの一番の苦しみはフランスの聖マグダレナソフィアからの手紙が２年もの間、とどかなかったことでした。この間、聖マグダレナソフィアは実際にはお手紙を出していらっしゃったのに、どうしたわけか、マザーデュシェーンのところに着かなかったのです。また、大切なシスターたちが病気でなくなった時も、すべての悲しみを神様におささげして、人々のために祈りつづけました。

なくなる２日前マザー・デュルージエが、聖マグダレナソフィアからアメリカに送られ、直接に聖マグダレナ・ソフィアの祝福と愛を伝えました。

１８５２年１１月１８日、マザーデュシェーンは８３才でこの地上を去って天国へ行かれました。アメリカでのマザーの生活は３４年でした。マザーデュシェーンのしんぽう強く、勇気のある心とご生活は、多くの人々の心に深く残り、後の時代に伝えられました。神様と深く一致していらしたマザーデュシェーンの祈りは世界中の教会、聖心会、聖心女子学院の子どもたち、すべての人々へと広がって行きました。また、マザーのなさったおしごとは、生きていらっしゃる時にはあまり実をむすんだように見えませんでしたが、なくなった後、おどろくほどの発展をとげました。アメリカ合衆国だけで５０もの学校がつくられ、カナダや南アメリカや東洋にも、アメリカ人のシスター達が出かけて行き、みこころの愛を広めました。

日本にもアメリカからたくさんのシスター達が来てくださいました。今はほとんどの方が天国へいらっしゃいましたが、その方々は日本のこどもたちのため働き、その一生をおささげになりました。今私達が、このように聖心女子学院で幸せに勉強できるお恵みをいただいているのは、聖マグダレナソフィアや、聖フィリピン・デュシェーン、そして、そのお心をついでアメリカ、オーストラリア、フランス、ドイツから、日本にイエズス様のみこころの愛を伝えるためにいらした多くのシスター方のお祈りと、ご苦労のおかげなのです。心から感謝をささげましょう。

聖フィリピン・デュシェーン

小さいころの聖フィリピン・デュシェーン

聖フィリピン・デュシェーンは、１７６９年8月２９日に、フランスのグレノーブルに生まれました。グレノーブルは、1 年中真っ白なアルプスの山々に近く、また、花のさきみだれる緑の丘にかこまれた町です。町の中央には、建てられて３００年以上にもなる聖アンドレ教会の塔が見え、朝、昼、晩には、そこからお告げの鐘が鳴りひびいてきました。

聖フィリピン・デュシェーンは、おさないころ、兄弟姉妹の他にとなりにすんでいるいとこたちといっしょに遊んだり、勉強したりして楽しくすごしました。フィリピンは、お母さまにて、神様にたいする深い信仰と、困っている人々にたいするやさしい心をもっていました。お金がなくて困っている人をみると、自分のおこづかいをみな、あげてしまいました。

そんな時、お母さまが、

「あなたがすきなものを買うようにあげたお金ですよ。」

というと、フィリピンは、

「わたくしは人をよろこばせることをするのが、一番うれしいのです。」

と、答えました。

フィリピンは本を読むのがすきでした。とくに歴史の本がすきで、近くの聖ロウレンス教会や、聖人のお墓のある古いミニスの修道院などの地図をよく研究して、兄弟やいとこたちと歩いてたずねました。

サンマリ・ドンオーの学校

１２才になった時フィリピンは、初聖体の準備をするため、サンマリ・ドンオーの修道院の学校の寄宿生になりました。そこで、フィリピンは、読み書き、歴史、地理、図工、家庭科の勉強や、アメリカ大陸のことも習いました。そこでネイティヴ・アメリカンの人々がだんだん奥地の方へ追いやられ、苦しい生活をしていること、また、中国の人々についても学び、自分がその人々のために神様のことを伝えに行きたいと思うようになりました。

サンマリ・ドンオーの学校では訪問会のシスターたちが教えていましたが、フィリピンはこのシスター方から、自分をおさえること、神様の前で、自分のするべきことはさいごまでやりとげることなども習いました。神様への深い信仰と愛が輝き始めたのもこのころでした。初聖体をいただいてから、フィリピンは、シスター方のように、朝早く起きて、聖堂で長いおいのりをしてから朝食をいただきました。昼間もときどき聖堂へ行って、ご聖体の前でおいのりをしました。そして、将来シスターになりたいと思うようになりました。

その頃、アメリカのルイジアナから帰ってきていらした神父様がいらっしゃいました。ネイティヴ・アメリカンへ神様の愛を伝える苦労話を聞き、フィリピンはぜひとも自分もネイティヴ・アメリカンの宣教をしたいと思いました。

ェーンはとても悲しみました。

それでもアメリカの他のところでは、生徒がどんどんふえて、聖心の学校はますますさかんになっていきました。これはきっとマザーデュシェーンのたくさんのお祈りとぎせいのよい土台があったからでしょう。

インディアンの町で

マザーデュシェーンが７２才になった時、長年の望みがかないました。それは、シュガークリークのネイティヴ・アメリカンのところへ行くことでした。マザーデュシェーンが、シュガークリークに到着すると、かざりをつけた馬に乗ったネイティヴ・アメリカンたちがうれしそうに出迎えてくれました。マザーデュシェーンはインディアンの小屋に住みましたが、そこは、虫だらけである上に、野犬が入ってきて、おいてあった食べ物を食べてしまうこともありました。しかし、いつもネイティヴ・アメリカンの子どもたちが、マザーデュシェーンのところへ遊びに来ていました。近所に住んでいたネイティヴ・アメリカンたちは、信仰があつく、ものわかりのよい人たちであったので、マザーデュシェーンはいつまでもそこにいたいと思っていました。

しかし、マザーデュシェーンの健康はおとろえはじめ、働くことができなくなってしまいました。また、ことばが通じなかったので、神様のことを話したくても話しあえませんでした。でも、ネイティヴ・アメリカンたちは、マザーデュシェーンのことを「いつも祈る婦人」と呼んで、心から尊敬していました。マザーと共にいらした他のシスターたちの働きを通して、シュガークリークのインディアンたちは、いろいろ新しいことを学びました。それは、マザーデュシェーンの熱心なお祈りのおかげだったのです。1 年たってから、このネイティヴ・アメリカンの人々になごりをおしみながら、マザーデュシェーンは、セント・チャールスへ帰りました。それからは天国にあこがれるほかは、何も考えられなくなっていらしたようでした。

発展の道

この頃のシスターたちの特色は、自分をわすれて人のためにつくすこと、物のないこと、苦しいことにたえること、深く祈る心をもっていることでした。シスターたちが来たことによってアメリカ大陸の中央を南に流れるミシシッピ川の沿岸の人々の宗教生活と教育は大きく前進していきました。

１８２１年に、聖マグダレナ・ソフィアは、フランスからアメリカへ、シスターたちを送ってくださいました。またルイジアナのグラン・コトーでは、広い土地を寄付してくださる方も出て、アメリカの聖心会は、だんだんと広がっていきました。前にしばらくの間、修道院があったセント・チヤールスへも、もどって行きました。前に住んでいた家のあったところに、三階建ての修道院も建てられました。その他の都市にも次々に聖心がたてられました。

マザーデュシェーンは、その頃５つの聖心を見て回るため、４カ月もかかって川をわたり、山をこえて旅をしました。途中で伝染病にかかり、高い熱に苦しみましたが、ふしぎにも快復し、フロリッソンに帰ることができました。そこでも悪い病気がはやり、学校は、もう開いていられないほどになっていました。これは、マザーデュシェーンにとってとてもつらいことでしたが、ちょうどその頃に、ヨーロッパからいらしたイエズス会の神父様方が助けてくださいました。神父様方は、はじめてアメリカの土地にいらっしゃいましたので、マザーデュシェーンは、いろいろお手伝いをしてあげました。

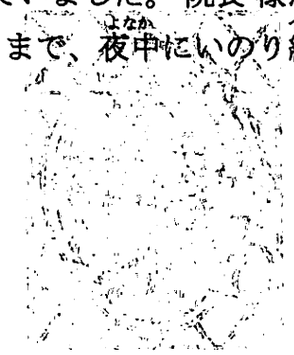
１８２７年にマザーデュシェーンは、セント・ルイスに、長い間望んでいた孤児のための学校や、恵まれない子供たちの学校も作りました。その近所の人々の教育のためにもつくしました。しかし、コレラや他の伝染病が流行し、いまのようなよい薬がなかったので、シスターや子供たちの中で死ぬ人が出ました。マザーデュシェーンは看病に疲れて、一度に髪の毛が真っ白になるほどでした。その上、フランスでは、なつかしいサンマリ・ドンオーの学校が閉められたという知らせが入ったので、マザーデュシ

訪問会

お父様はこんなフィリピンを見て、シスターになっては困ると思い、フィリピンを家に連れて帰りました。フィリピンはもう１７才になっていましたので、両親は結婚させようと思って相手を探していましたが、フィリピンはいつもじみな服装をし、いつかは修道院に行くという決心をしていました。

ついにフィリピンは、おばさまに頼んで、サンマリ・ドンオーの院長様のところに、いっしょに連れて行ってもらいました。その時から家には帰らず、修道院に入りました。家では両親も兄弟も深く悲しみました。数日後、お母様と兄弟たちがサンマリ・ドンオーに訪ねてきました。家でどんなにお父様がなげいているか、みながさびしがっているか、お母様が、小さい妹たちを育てるのにどんなにフィリピンをたよりにしているかを聞かされ、フィリピンは胸もつぶれる思いでした。しかし、フィリピンの心は、家の人達を愛する強い愛よりも、もっと強い神様の愛にひかれたのでした。お母様たちも、ふしぎな神様からの助けとなぐさめをいただいて帰りました。

フィリピンは、毎日聖人の伝記を読み、いつかは聖フランシスコ・ザベリオのようにイエズス様を知らない人々に、その愛を知らせにいけますようにといのり続けました。また、修道院のきそくをよく守り、自分より弱いシスター達を助けました。フィリピンは、小さい時から、強い体と、心と、行動力をもっていました。院長様からおゆるしをいただいて、ずーっとひざまづいたままで、夜中にいのり続けたり、断食をしたりしました。



フランス革命のあらし

この頃、フランスはフランス革命のまっただなかで、革命のえいきょうがグレノーブルにもやってきました。革命派であったお父様は、フィリピンが誓願をたてて修道女（シスター）になっては困ると思いました。そして、フィリピンが２５才になるまで誓願をたててはいけないといいました。フィリピンは6年もの間、シスターになるのを待たねばなりませんでした。指導してくださる神父様が、

「神様はあなたに悪いことをなさるはずがありません。きっとあとになって、神様が、なにをあなたに望んでいらしたかがわかりますよ。」

と、なぐさめてくださいました。

フィリピンはよくいのり、だれにも親切でした。だれが、どんな用事をたのんでも気持ちよく引き受けて、上手にしてくれました。

けれども、１７９１年には、フィリピンのいた訪問会の修道院は解散を命じられました。お父様はフィリピンを家に連れもどしました。家では、いとこのジュリー・ランバーとできるだけ修道院にいるときと同じ生活をしました。革命がひどくなり、ごミサにもあずかれなくなりました。けれども、デュシェーンの家では、革命の人達からにげて、かくれていた神父様を家のしごとのかんとくをする人にやとったので、フィリピンたちは、かくれたところでごミサにあずかり、指導をしていただくこともできました。

やっと着いたセント・チャールスの家は古くて大きな家で、窓も戸もちゃんとしまらないようなところでした。家の裏には広い果樹園があり、家の下の方には川が見え、その横の道を開拓民やネイティヴ・アメリカンがよく通っていました。マザーデュシェーンはネイティヴ・アメリカンたちにぜひ神様のことを教えたいと思っていました。しかし、ことばが通じないので、近寄ってもきませんでした。９月４日に、この新しい修道院で最初のごミサがささげられ、ご聖体のイエズス様が、聖堂にいつもいらっしゃるようになりました。

アメリカに学校が始まったころ

９月に学校が始まった時は子どもの数は、２１人でしたが、次第に増えていきました。冬の寒い時には、朝食のために牛からしぼったミルクが、家に帰るまでに凍ってしまうほどの寒さでしたが、貧しい子ども達は、学校へはだしで来ました。初めは神様のことを何も知らない子ども達も、シスターたちのお話で、だんだんとわかるようになってきました。本はじゅうぶんなくて、一冊の本をみんなでまわして使いました。まきも足りなかったので、遊びの時間には走り回って体を暖めました。学校の規則は、フランスの聖心と同じでした。子供達はすなおで、シスター達のいうことに従っていました。

その後学校は、セント・チャールスからフロリッソンに移り、新しく建てた家で始まりました。到着するとすぐ、聖堂が整えられ、ごミサが始まりました。他の聖心と同じように、聖堂のイエズス様がいつも中心で、聖心の愛が学校の土台でした。生徒の数もしだいにふえ、大きい生徒の中からは、シスターになりたい人も出てきました。そのため修練院がひらかれ、ハミルトンという姉妹が最初のアメリカ人のシスターになりました。ふしぎにも学校で教室が足りないとか、物が足りないとか、そのほかいろいろむずかしいことがあればあるほど、シスターになりたい人たちがふえていったのでした。

アメリカへ

１８０６年の１月にフィリピンのところへ、ちょうどアメリカのミズーリとミシシッピの布教から帰ってこられた神父様が訪ねていらっしゃいました。その神父様は、アメリカでは、どんなにイエズス様の愛を伝える人が必要かということや、広い原野で行方不明になった宣教師のことなどを熱心にお話しになりました。フィリピンは、神様が自分を呼んでいらっしゃるのを感じ、宣教女として、アメリカへ行きたいと望むようになりました。しかし、その望みが実現されるには、まだ１２年も待たねばなりませんでした。この間、フィリピンはマザーデュシェーンと呼ばれ、サンマリ・ドンオーの学校で多くの子どもたちを教えていました。またパリの本部では、事務長として働きました。１８１７年アメリカのルイジアナから司教様が、アメリカでイエズス様の愛を伝えるための神父様やシスターを集めに来られました。マザーデュシェーンは、この時をのがしては大変と思い、熱心にマザーバラに、アメリカに自分を送ってくださるようにお願いしました。この時、マザーバラはこれが神様のお望みであるということがはっきりわかり、マザーデュシェーンの願いをきき届けることにしました。

１８１８年の３月２１日、いよいよボルドーから他の４人のシスターたちといっしょにマザーデュシェーンは、レベッカという小さい帆船で出発しました。レベッカはマザーデュシェーと同じように冒険好きで２カ月半もの長いあいだ、荒れ狂う大西洋を苦心して進みました。船長の頼みでシスターたちが、マリア様の歌を歌うとふしぎにもお天気がよくなり、海も静かになるのでした。やっと、５月２９日の聖心の祝日に長い航海が終わりました。マザーデュシェーンは、長い間の希望がかなったうれしさにアメリカの土にせっぷんし、神様に心から感謝をささげました。そこは大きなミシシッピ川の下流、ニューオルレアンスへ２０マイルのところでした。そこではウルスラ会の修道院のシスターたちに暖かく迎えられ、すべて必要なものまで整えてくださいました。でもそこはアメリカの司教様が待っていらっしゃるセント・チャールスからはまだ遠かったので、シスターたちはまた船に乗って長い苦しい旅をしなければなりませんでした。

フィリピンたちは、朝は５時に起きてお祈りをしました。一日の間にも地下の聖堂でときどきお祈りをしました。フィリピンはお母様のおてつだいもよろこんでしました。お料理や、そうじ、食事のあとかたづけなどもよくてつだいました。けれども、お母様はご病気になり、フィリピンはいっしょうけんめい、かんびょうをしましたが、そのかいもなく、天国へ旅立たれました。

その後、フィリピンは自分と同じ考えを持つ友達といっしょに、町の小さい家に住んで、病気の人や貧しい人たちをたずねて、死ぬまで看病をしてあげたりしました。刑務所にとじこめられている神父様たちをたずねることは、危険なことでしたが、フィリピンは神父様達をたずねて、必要なものをとどけたりしました。また、学校にいけない貧しい子供達に、神様のお話をしてあげました。このように革命のために苦しんでいる人達に、すこしでもやくにたつように努力しました。

そのうちに、ようやく革命の火もおさまって、みなが教会へ行けるようになったので、フィリピンはサンマリ・ドンオーの修道院へ帰る決心をしました。家族の人達は反対しましたが、フィリピンは、

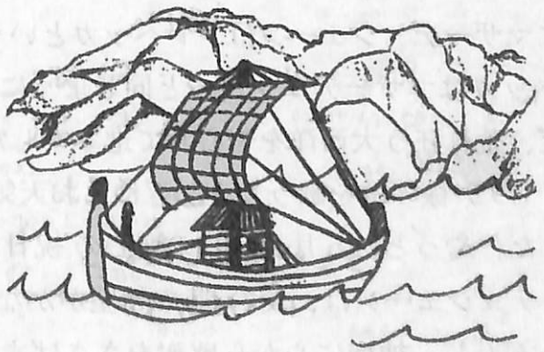
「このつらい別れは、きっと私達家族に一致と平和と幸せをもたらすでしょう。」

といいました。

聖心会修道院の生活

１２月の雨の降る冷たい日、フィリピンは、ひとりの友達とけわしい山をのぼって、もとの修道院へもどりました。その時、教えをならっていた男の子たちが、にもつをかついでいっしょに山をのぼってくれました。建物はすっかりあれはてて、戸も窓もなく、寒い風がふき通るようなところでしたが、フィリピンは、毎日いっしょうけんめいにおそうじをしながら、他のシスターたちの帰ってくるのを待っていました。前にいたシスターたちが、つぎつぎに帰ってきました。そして、フィリピンと規則正しい修道院の生活を始めました。でも、寒い山の中の修道院での生活はとてもたいへんでしたので、シスターたちはだんだんとやめて帰って行きました。

とうとうさいごにフィリピンひとりだけが、山の上の大きな家にとりのこされてしまいました。

けれどもフィリピンは、どんなに苦しくても神様のためなら、どんなことでもさいごまでやりとげる人でした。フィリピンは苦しさの中で、希望をもって、お祈りをして待っていました。このときもふしぎなことに神様からの助けがありました。いつもフィリピンをはげまし、助けてくださっていたジーン・リベ神父様がこんなお話をしてくださいました。それは、アミアンにマグダレナ・ソフィアという若い人が聖心会という修道院を始めて、女子の教育をしていますということでした。フィリピンはその会が聖心の愛の精神に生き、熱心なひろい心をもって教育のしごとをしていること、おいのりをいっしょうけんめいして、神様と深く一致して生きる会であることを知りました。フィリピンはその会に入って聖心会のシスターになって自分を神様におささげしたいと思うようになりました。そして、サンマリ・ドンオーの学校も聖心会におわたししたいと思いました。フィリピンは思い立つとすぐに実行したい人でしたが、神様はそのフィリピンを少しおためしになりたかったのでしょうか。それが実現するまでには、２年もの年月がかかりました。その間に、サンマリ・ドンオーに入学する生徒の数がどんどん増えていきました。また、シスターとなって働く人も増えていきました。

ついに１８０４年のクリスマスのころに、聖マグダレナ・ソフィアは、二人のシスターたちと、サンマリ・ドンオーを訪れました。そして、聖心会の修練院を開くことになりました。聖マグダレナ・ソフィアは、何でもよくわかってくださるかしこさがあり、やさしく、そこにいてくださるだけで、神様の愛を感じさせる方でしたので、フィリピンは、そのすばらしさがわかり、心から尊敬しました。聖マグダレナソ・フィアもフィリピンのがまん強さ、希望の広さ、なんにでもさいごまでやりとげる意志の力を知ることができたので、この二人はすぐ心がぴったりと合ったのでした。サンマリ・ドンオーではなごやかで楽しい生活が始まりました。ここにも他の聖心会でみられるように、元気にあふれ、熱心でおしみなく奉仕する精神にみちた修道院が始まりました。１年ほどたつと、聖マグダレナ・ソフィアは、アミアンにお帰りになりました。その後は、フィリピンたちを数多くのお手紙で導きはげましてくださいました。